

舌切りすずめ

楠山正雄

青空文庫

むかし、むかし、あるところにおじいさんとおばあさんがあり
ました。

子供こどもがないものですから、おじいさんはすずめの子を一羽わ、だ
いじにして、かごに入れて飼かつておきました。

ある日おじいさんはいつものように山へしば刈かりに行って、お
ばあさんは井戸いどばたで洗濯せんたくをしていました。その洗濯せんたくに使う
のりをおばあさんが台所だいどころへ忘れていった留守るすに、すずめの子
がちよろちよろかごから歩き出だして、のりを残のこらずなめてしま

ました。

おばあさんはのりを取りに帰って来ますと、お皿の中にはきれいにのりがありませんでした。そののりはみんなすずめがなめてしまったことが分かると、いじのわるいおばあさんはたいへんおこつて、かわいそうに、小さなすずめをつかまえて、むりに口をあかせながら、

「この舌がそんなわるさをしたのか。」

と言つて、はさみで舌をちよん切つてしまいました。そして、

「さあ、どこへでも出ていけ。」

と言つて放しました。すずめは悲しそうな声で、「いたい、いたい。」と鳴きながら、飛んでいきました。

夕方ゆうがたになつて、おじいさんはしばを背負せおつて、山から帰かえつて来て、

「ああくたびれた、すずめもおなかがすいたろう。さあさあ、えさをやりましょう。」

と言いい言いい、かごの前まえへ行いつてみますと、中にはすずめはいませんでした。おじいさんはおどろいて、

「おばあさん、おばあさん、すずめはどこへ行いつたろう。」
と言いいますと、おばあさんは、

「すずめですか、あれはわたしのだいじなのりをなめたから、舌したを切きつておい出だしてしまいましたよ。」

とへいきな顔かおをして言いいました。

「まあ、可愛いそうに。ひどいことをするなあ。」
とおじいさんは言^いつて、がっかりした顔^{かお}をしていました。

二

おじいさんは、すずめが舌^{した}を切^きられてどこへ行^いつたか心配^{しんぱい}で
たまりませんので、あくる日は、夜^よがあけるとさっそく出^いかけて
いきました。おじいさんは道^{みち}々々、つえをついて、

「舌^{した}切りすずめ、

お宿^{やど}はどこだ、

チュウ、チュウ、チュウ。」

と呼びながら、あてもなくたずねて歩きました。野を越えて、山を越えて、また野を越えて、山を越えて、大きなやぶのある所へ出ました。するとやぶの中から、

「舌切りすずめ、

お宿はここよ。」

チュウ、チュウ、チュウ。」

という声が聞こえました。おじいさんは喜んで、声のする方へ歩いていきますと、やがてやぶの陰にかわいらしい赤いおうちが見えて、舌を切られたすずめが門をあけて、お迎えに出ていました。

「まあ、おじいさん、よくいらつしやいました。」

「おお、おお、ぶじでいたかい。あんまりお前まえがこいしいので、たずねて来きましたよ。」

「まあ、それはそれは、ありがとうございます。さあ、どうぞこちらへ。」

こう言いつてすずめはおじいさんの手てをとって、うちの中へ案あんな内いしました。

すずめはおじいさんの前まえに手てをついて、

「おじいさん、だまってだいじなのりをなめて、申もうしわけがございませんでした。それをおおこりもなさらずに、ようこそたずねて下くださいました。」

と言いいますと、おじいさんも、

「何なんの、わたしがいなかっただばかりに、とんだかわいそうなことをしました。でもこうしてまた会あわれたので、ほんとうにうれしいよ。」

と言いいました。

すずめはきようだいやお友ともだちのすずめを残のこらず集あつめて、おじいさんのすきなものをたくさんごちそうをして、おもしろい歌うたに合あわせて、みんなですずめ踊おどりを踊おどって見みせました。おじいさんはたいそうよろこんで、うちへ帰かえるのも忘わすれていました。そのうちにだんだん暗くらくなってきたものですから、おじいさんは、
「今日きょうはお陰かげで一日いちにちおもしろかった。日の暮くれないうちに、どれ、おいとまとしましょう。」

と言つて、立ちかけました。すずめは、

「まあ、こんなむさくるしいところですから、今夜はここへと
まっついていらつしやいな。」

と言つて、みんなで引きとめました。

「せつかくだが、おばあさんも待つているだろうから、今日は帰
ることにしましょう。またたびたび来ますよ。」

「それは残念でございますこと、ではおみやげをさし上げます
から、しばらくお待ち下さいまし。」

と言つて、すずめは奥からつづらを二つ持ってきました。そし
て、

「おじいさん、重いつづらに、軽いつづらです。どちらでもよろ

しい方ほうをお持もち下ください。」

と言いいました。

「どうもごちそうになった上、おみやげまでもらってはすまないが、せっかくだからもらって帰かえりましょう。だがわたしは年としをとっているし、道みちも遠とおいから、軽かるい方ほうをもらっていくことにしますよ。」

こう言いっておじいさんは、軽かるいつづらを背せ負おわせてもらって、「じゃあ、さようなら。また来きますよ。」

「お待ち申もうしております。どうか気きをつけてお帰かえり下くださいまし。」
と言いって、すずめは門かどぐち口ぐちまでおじいさんを送おくって出でました。

三

日が暮れてもおじいさんがなかなかもどらないので、おばあさんは、

「どこへ出かけたのだろう。」

とぶつぶつ言っているところへ、おみやげのつづらを背負って、おじいさんが帰って来ました。

「おじいさん、今ごろまでどこに何をしていたんですね。」

「まあ、そんなにおおこりでないよ。今日はすずめのお宿へたずねて行って、たくさんごちそうになったり、すずめ踊りを見せてもらった上に、このとおりっぱなおみやげをもらって来

たのだよ。」

こう言いつてつづらをお下ろすと、おばあさんは急きゆうににこにこしながら、

「まあ、それはようございませうねえ。いったい何なにが入はいっているのでしよう。」

と言いつて、さつそくつづらのふたをあけますと、中から目のさめるような金きんぎん銀さんごや、宝珠ほうじゆの玉たまが出てきました。それを見みるとおじいさんは、とくいらしい顔かおをして言いいました。

「なにね、すずめは重おもいつづらと軽かるいつづらと二つ出だして、どちらがいいというから、わたしは年としはとっているし、道みちも遠とおいから、軽かるいつづらにしようといつてもらつてきたのだが、こんながいい

ものが入^{はい}つていようとは思^{おも}わなかった。」

するとおばあさんは急^{きゆう}にまたふくれつ面^{つら}をして、

「ばかなおじいさん。なぜ重^{おも}い方^{ほう}をもらつてこなかったのです。

その方^{ほう}がきつとたくさん、いいものが入^{はい}つていたでしように。」

「まあ、そう欲^{よく}ばるものではないよ。これだけいいものが入^{はい}つていれば、たくさんではないか。」

「どうしてたくさんなものですか。よしよし、これから行^いつて、わたしが重^{おも}いつづらの方^{ほう}ももらつてきます。」

と言^いつて、おじいさんが止^とめるのも聞^きかず、あくる日^{あさ}の朝^{あさ}になるまで待^またれないで、すぐにうちをとび出^だしました。

もう外^{そと}はまっ暗^{くら}になっていましたが、おばあさんは欲^{よく}ばつた一^い

っしん
心でむちやくちやにつえをつき立てながら、

「舌切りすずめ、

お宿はどこだ、

チュウ、チュウ、チュウ。」

と言いい言いたずねて行きました。野を越え、山を越えて、また野を越えて、山を越えて、大きな竹やぶのある所へ来ますと、やぶの中から、

「舌切りすずめ、

お宿はどこよ。

チュウ、チュウ、チュウ。」

という声がありました。おばあさんは「しめた。」と思つて、声

のする方へ歩いて行きますと、舌を切られたすずめがこんども門をあけて出てきました。そしてやさしく、

「まあ、おばあさんでしたか。よくいらつしやいました。」

と言つて、うちの中へ案内をしました。そして、

「さあ、どうぞお上がり下さいまし。」

とおばあさんの手を取つておざしきへ上げようとしましたが、おばあさんは何だかせわしそうにきよときよと見まわしてばかりいて、おちついて座ろうともしませんでした。

「いいえ、お前さんのぶじな顔を見ればそれで用はすんだのだから、もうかまつておくれでない。それよりか早くおみやげをもらつて、おいとましましょう。」

いきなりおみやげのさいそくをされたので、すずめはまあ欲よくの
 深ふかいおばあさんだとあきれてしまいました。おばあさんはへい
 きな顔かおで、

「さあ、早はやくして下くださいよ。」

と、じれったそうに言うものですから、

「はい、はい、それではしばらくお待ち下くださいまし。今いまおみやげ
 を持もつてまいりますから。」

と言いって、奥おくからつづらを二つ出だしてきました。

「さあ、それでは重おもい方ほうと軽かるい方ほうと二つありますから、どちらで
 もよろしい方ほうをお持もち下ください。」

「それはむろん、重おもい方ほうをもらつていきますよ。」

するとどうでしょう、中を目のくらむような金銀さんご思おもいの外ほか、三つ目小僧みめこぞうだの、一つ目小僧ひとめこぞうだの、がま入にゅうどう道どうだの、いろいろなお化けばがによろよろ、によろよろ飛び出だして、「この欲よくばりばあめ。」と言いいながら、こわい目をしてにらめつけるやら、気味きみの悪い舌したを出だして顔かおをなめるやらするので、もうおばあさんは生いきた空そらはありませんでした。

「たいへんだ、たいへんだ。助たすけてくれ。」

とおばあさんは金切り声かなきごえを上げあげて、一生懸命いっしょうけんめい逃げ出だしました。そしてやつとのことで、半分死はんぶんしんだようにまっ青さおになつて、うちの中うちにかけ込みますと、おじいさんはびっくりして、

「どうした、どうした。」

と言いました。おばあさんはこれこれの目にあつたと話して、

「ああもう、こりこりだ。」と言いますと、おじいさんは氣の毒
そうに、

「やれやれ、それはひどい目にあつたな。だからあんまりむじひ
なことをしたり、あんまり欲ばよくつたりするものではない。」と言
いました。

青空文庫情報

底本：「日本の神話と十大昔話」 講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年5月10日第1刷発行

1992（平成4）年4月20日第14刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

舌切りすずめ

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>